

# act 4

art, culture, tradition

[発行] 札幌市教育文化会館  
アクト

JANUARY 2011



能楽

# Noh

# 能は、



# 大人の味。



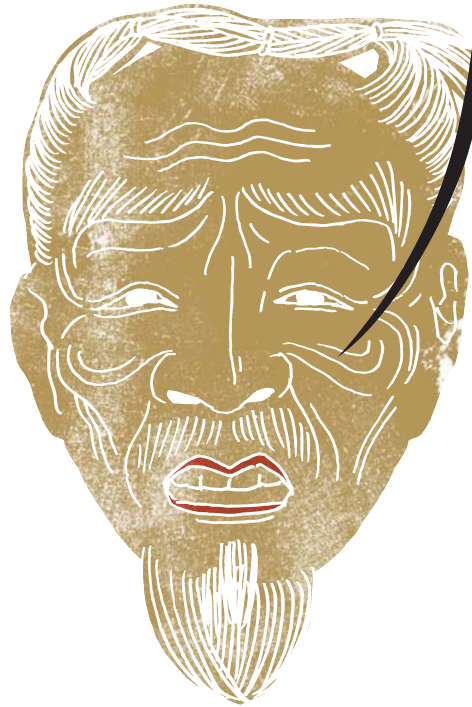
「能ってなんなんだろう？」そう聞かれて答えるのは、実は難しい。簡単に言えばセリフではなく謡(うたい)とよばれる歌で状況説明や役者の気持ちを伝える歌舞劇で、洋風と言えばオペラに似たもの、ということになる。だけどオペラには人間のドラマがあり、はっきりとしたストーリーがある。一方、お能には必ずしも物語があるわけではないし、謡も現代の言葉とは違っているので、演目によっては、ちんぷんかんぷんに思う時もあるだろう。にもかかわらず、さかのぼっては奈良時代から断絶することなく、ファンを魅了し続

けてきた能の魅力って？それを説明しようとすると、まるで寿司を食べたことのない人に、寿司の味を説明するように難しい。「まず食べてみて」というのが一番いい答えだ。たとえば寿司はネタの名前を知らなくても、食べれば好きか嫌いかわかると判断できる。また、淡泊すぎて味がよくわからないけど、食べているうちに好きになるネタもある。能も同じで、200番以上の演目があるなかで、味わいはそれぞれ。たまには何百年もの歴史を積み重ねてきた「大人の味」を、堪能してみるのもいいかもしれない。

脇能物

小牛尉(こうしじょう)

神の化身として登場する老人が用いる面。神性をおび、老人をあらわした面のなかでも最も品位があるとされる。めでたい内容の能に使われる。



翁付き五番立(神男女狂鬼)と序破急

陽が沈むまでの間に「翁」+五本の能(翁付き五番立)を上演するのが、江戸時代の正式なプログラム。「能にして能にあらざ」と言われる「翁」の後、「序・破・急」の流れで五本の能が演じられる。「序・破・急」とは能における起承転結のようなもので、五番立だけではなく、ひとつひとつの演目の中にも「序・破・急」の流れがある。能独特の“時間的な流れ”をつくりだす、重要なルールだ。

# 序

「序」は能の雰囲気をつかみとらせる導入部分で、「脇能」が演じられる。翁舞のあと、同じシテ(主役)によって上演していたので、「翁のワキにおかれる能」という意味で脇能といわれている。

修羅能

中将(ちゆうじょう)

貴族や平家の公達(きんだち)の霊に用いる面。仏教では、人を殺した人間は死後「阿修羅」という地獄に落とされてしまうという考え方があり、修羅に苦しむ武士が現世に救いを求める能に使われる。



「破」の部分は「序」を受け、じっくりと能に見入らせる部分。武士がシテとなる「修羅能」、女性がシテとなる「鬘物」、狂女がシテの「雑能物」などを上演し、もりあがる時間を作る。

# 破

雑能物

般若(はんiny)

女性の嘆きと怒りの両方が表現された面。仏教用語で般若は「智慧」をあらわし、祈りによって悟りを開くという意味をもって、能においても般若になった女性はほとんどが改心するストーリーになっている。



切能物

顰(しかみ)

切能では鬼や天狗・龍神などがシテとなり、最後には自分の世界に帰っていく。顰は危害を加える悪い鬼に用いる面で、口が大きく開いているのが特徴。「しかめっ面」の語源であるといわれている。



鬘物

小面(こおもて)

女性面の代表的な面で、若い女性をあらわしている。人間の美女はもちろん、天女や性別不明の精霊なども小面をつかう。女性役はかつら(鬘)をつけるので鬘物という。



「急」の部分は結末で、「破」の勢いある流れを汲みながら、フィナーレとなるわくわくするようなテンポの「切能」を見せて終了。絶妙に組まれた演目の流れで、長い能を見ていたことなどすっかり忘れてしまう。

# 急

# 能

NOH

## 波乱万丈な歴史を経て完成した、日本の美学。

まさに日本の伝統文化!というイメージがある「能」。格式が高くて決まりごとが多そう…。でも、能のもともとの源流をたどっていくと、案外そう堅苦しいものでもないみたい。観ている人を楽しませたり、喜ばせる「大衆芸能」が、能のそもそものはじまりなのだから。奈良時代に、中国から伝来した「散楽」というものがあり、これが能のもとになっているといわれている。元は笑わせる芸やモノマネ、曲芸、奇術などをおこなう芸能だったらしい。演者たちは「散楽戸」という養成機関に組み入れられて、朝廷おかかえの集団になっていった。ところが、奈良時代末期に散楽戸が廃止されると、演者たちは職を失って右往左往。結局、寺社に属して、座という組織を組むようになった。彼らは寺社の保護を受けることによって座を維持するかわりに、寺社が催す祭事などでは、芸の披露を義務づけられていたらしい。「翁猿楽」などの神に奉納する舞いは、この時期舞われていた曲がいまも伝えられているわけだ。その散楽の芸の中でも、どうやってその役柄に似せるか、という「モノマネ」芸を発達させていったのが「猿楽」で、明治に入って「能楽」になるのだが、そんなトントン拍子に話が進んだわけではない。ライバル、「田楽能」という芸能とのしぎを削らなければいけなかったのだ。この芸能は、舞いを中心としたテーマを抽象的に表現する比較的上品なもの。田楽能は貴族社会にも受け入れられ、一時は北条高時や足利尊氏など時の権力者が没頭してしまうほどだった。それでも猿楽が生き残ってこられたのは、猿楽を見事なまでに体系化したある人物がいたから。それが観阿弥・世阿弥(かんあみ・ぜあみ)親子だ。鎌倉時代後期から室町時代初

頭、二人はただのモノマネ芸だった猿楽を、鼓に合わせて謡いつつ、扇を持って舞う他の芸能を取り入れて、「猿楽能」にまで発展させていった。将軍足利義満は、遠方まで足を運び観阿弥・世阿弥の能を見にいった以来、観世座のファンになり、絶大なパトロンになった。ちなみに、当事11歳の世阿弥は絶世の美男子だったらしい。時の権力者の加護のもと、世阿弥は能の制作を精力的に進め、『風姿花伝』『花鏡』など、現代にも残る能楽論を次々と記していった。

戦国時代以降は、織田信長の能好きに加え、豊臣秀吉は自分を主人公にした能を作らせ、自分で演じてしまうほどの能の愛好家だったことから、多くの能役者は武家からの支援を元に生計をたてていくことに。徳川幕府時代には正式な儀式用の芸能となったことで、荘重で気迫の厳しさが感じられる芸質に変わっていった。このあたりから、庶民が能を観ることができる機会が減り、しだいに能は一般市民の芸能ではなくなってしまったのだった。

ところが、明治維新が起こると幕府と連係していた能の平安は崩れ去る。幕府が倒されてしまう＝パトロンがいなくなってしまうという状況になった能は、一時断絶の危機にさらされてしまったが、そこにまた救いの手が差し伸べられる。能の危機を知った新政府や皇室、華族や財閥などは能の存続のために力を貸したのだ。様々な芸能と入り混じり、武家社会で磨き上げられた猿楽能。時代の移り変わりとともに、一般の人々にも開いた芸能として「能楽」に生まれかわって、現在は才能あふれる若手の能楽師もぞくぞくとあらわれているらしい。時代を超えて伝えられてきた日本の美、観ないでいるのはもったいない。

### 5分でわかる能の演目

## 『天鼓』

鼓が天から降ってくるという、不思議なエピソードを持って生まれた「天鼓」。天才的な鼓の才能を持った子と、その父がたどった数奇な運命を描いています。

### 天才ドラマー、天鼓誕生

舞台は中国・後漢の時代です。王伯・王母という夫婦がいましたが、王母はある日天から鼓が降ってきて、胎内に宿るという不思議な夢をみました。そうして授かった子どもが「天鼓」です。その後、本当に鼓が天から降ってきたのです。

天鼓とその鼓は一緒に育つように時を過ごしました。天鼓の鼓の才能はケタ外れに素晴らしく、その音は人々を感動させるようなものでした。その妙な音の噂を聞いた帝は、鼓を宮中に召すようお達しを出します。天鼓はその命に逆らい、鼓を持って山中へ隠れますが、捕らえられ、呂水の川に沈められてしまいます。鼓は宮中へ運び込まれましたが、その後、誰が打っても鼓が鳴ることはありませんでした。

### ふたたび鼓を打ち、舞い踊る

息子の死を歎き悲しむ王伯のもとに、帝から勅使が遣わされます。帝は、天鼓の父

が打てば鼓が鳴るであろうと思い、王伯を宮中に召したそうとするのです。王伯は、鼓が鳴らなければ自分も殺されるであろうことをわかっていましたが、それを覚悟で宮殿に上がります。帝の前での鼓を打つことになった王伯は、失われてしまった子への忘れ難い愛情を語りながら、「もし鼓が鳴れば、それこそわが子の形見」と鼓を打ちます。すると、それまで鳴らなかった鼓は妙な音を発したのです。子を想う親の心、そしてそれに応えるように返した鼓の音色に帝も心を打たれ、涙します。

天鼓を弔うため、帝の命により呂水のほとりで管弦講が行われると、天鼓の亡霊があらわれます。天鼓は弔いに感謝しつつ、死後の苦しみから救われた喜びに、鼓を無心に鼓を打ち、舞い戯れるのです。

### 「天鼓」、ここがみどころ

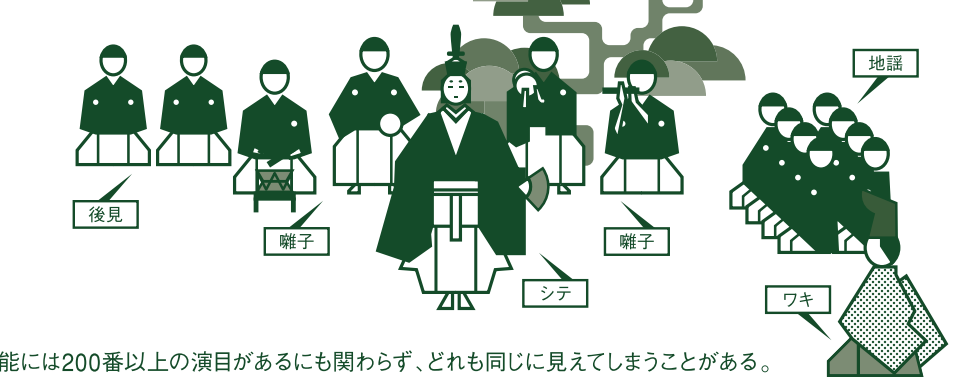
舞台では最初に勅使(ワキ)が登場し、天鼓の出生や亡くなった経緯を説明し、

天鼓の父・王伯(前シテ)のもとに向かう内容の語りから始まります。つまり、勅使は登場人物でありつつも、ナレーション・物語の進行役のような役目も果たしているわけです。

前半の見所は、息子に先立たれ悲嘆に暮れる父の姿。そして鳴らないであろう鼓にそっと近づき打つと、音を発するその場面です。打つと王伯(前シテ)がほんの少し右に向き、鼓に聞き入る型を見せ、鼓が音を発したことを表現します。

後半では前半の暗く静かな内容とは一転。あざやかな装束を身にまとった天鼓(後シテ)が登場し、帝への恨みも父への想いも昇華するように浮かれて舞い踊る、陽気な舞台となります。王伯と天鼓の役はひとりのシテが舞っているので、前半の「子に対する悲哀を表す王伯」と、後半の「亡霊となっても大好きな鼓を打ち興じる天鼓」。この対照的な役の演じ分けが、みどころとなるでしょう。

## 能舞台での役者と配置



能には200番以上の演目があるにも関わらず、どれも同じに見えてしまうことがある。それは、出演者の役割や位置などに共通して定められた様式があるから。能のルールがわかると、もっと能がおもしろくなる!

### シテ(シテ方)

能の主役のこと。面をつけて扇を持って舞っている人のこと。面をつけるのはシテのみ(シテの助演者であるツレもつけることがある。また、直面“ひためん”といってシテでも面をつけない役柄もある)。亡霊やその化身あるいは神体・鬼畜の類として登場することが多い。前後二場から成る能では一曲の前半の主人公を「前シテ」、一曲の後半を「後シテ」という。

### ワキ(ワキ方)

シテの相手役を務める。僧や大臣など、現実世界の人間の役柄が多く、状況の説明をしたり、シテと会話をして物語を進める。観客と舞台をつなげる、重要な役。

### 囃子(囃子方)

いわゆる楽団のこと。笛、小鼓、太鼓、大鼓の4種の楽器を、各一人ずつ演奏する。謡と合わせて情景や心情を表現する。楽器は他楽器を兼ねない分業制。

### 地謡

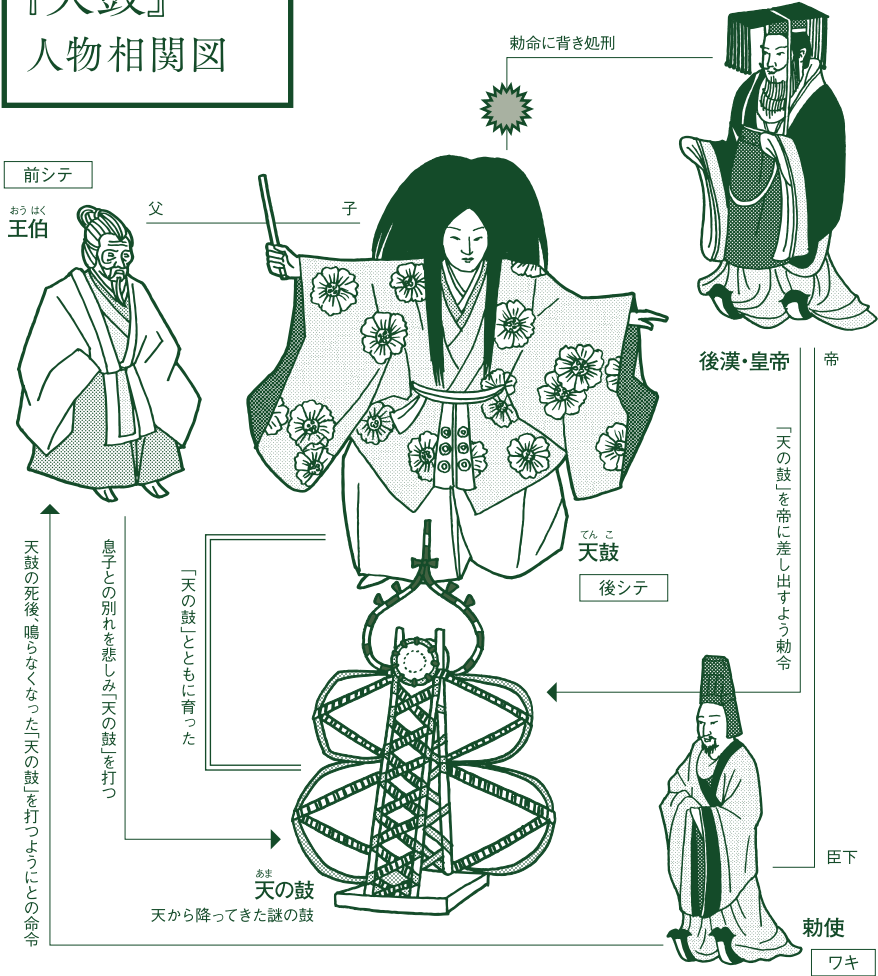
コーラス(合唱団)のこと。通常は前後各4名ずつの計8名から成っている。能は、すべてのセリフが「謡(うたい)」となっている。

### 後見

舞台が円滑に進むようにサポートをする人物のこと。装束の乱れを直したり、道具の出し入れを行ったりする。シテやワキに事故が起こったときには、その代役を務めることも。

## 『天鼓』

### 人物相関図



### 観るまえに知っておきたい

## 能楽用語集

### 【謡(ウタイ)】

能は、セリフすべてにフシ(メロディー)がつけられた音楽劇となっている。このセリフが書かれた本を、「謡本(うたいぼん)」と言う。

### 【ツレ】

主人公(シテ)や脇役(ワキ)に連れられて登場する人物のこと。シテに連れられている場合は、そのまま「ツレ」、ワキに連れられている場合は、「ワキツレ」と呼ぶ。

### 【面(オモテ)】

面の種類は250種にも及ぶと言われており、長い歴史の中で翁、女面など様々なものが作られてきた。シテ、ツレのみがつける。

### 【装束(ショウゾク)】

能では、役柄によって装束のルールが決まっている。たとえば、赤色がベースの装束は若い女を表すように、決まりごとがわかれば舞台の情景が浮かびやすくなる。

### 【見所(ケンジョ)】

観客席のこと。ケンジョ、ともいう。能楽堂では舞台の正面に位置する「正面」。舞台に向かって左横に位置する「脇正面」。そして、舞台の斜め位置にある「中正面」の3種類がある。

### 【橋掛かり(ハシガカリ)】

本舞台へとつながる長い廊下部分のこと。単なる通路ではなく、例えば幕の奥を「幽界」、本舞台を「現世」とたとえて、その間をつなぐ橋とするなど、様々な見立てとして存在する。

### 【目付け柱(メツケバシラ)】

本舞台にある柱のうち、正面から見て左手前の柱のこと。面をつけた能楽師は極端に視界が狭くなるため、この柱を目印に自分の位置を把握する。

### 【クモラス】

面そのものは泣き笑いの表情がない「中間表現」となっているが、面をやや下に向けることをクモラスといい、悲しみなど心情を抑えた場面を表し、上を向く「テラス」は喜びなど、心が晴れやかな時に使われる。

### 【シオリ】

片手を眉のあたりにかざして泣いていることを表す型。能では泣き叫ぶような演技はできないため、様式的に型で涙を表現する。

### 【中入り(ナカイリ)】

装束をかえる必要がある場合、前シテと後シテの間に狂言の語りが行われる。それを中入りというが、物語のあらすじをなぞる内容になっており、舞台を理解する手助けをする。

## 能ではなぜ面をかぶる?

能では、面は欠かせないアイテムのひとつ。なにしろ、面をかぶらない演目のときは、直面(ひためん)といって、「表情を一切出さない=面をかぶっている」状態で舞うという徹底ぶり。つまり、面をつけていない時でも能役者はあくまで「直面」という、目には見えない面をかぶって演じているということだ。喜怒哀楽を表情に一切出さず、型のみで感情を表す高度なことを能役者はやっのける。

でも、そこまでして面にこだわるのはなぜだろう? はっきりした理由は定かではないが、いくつかの説がある。ひとつは、能役者に神が降りてくるといふ考えの「依代(よりしろ)説」。古くから舞われて

老若男女、果ては鬼や妖精まで多種多様なバリエーションをもつ能面。でも、そもそもなぜ被らなければならないのだろうか?

いる「翁」は、神に五穀豊穡を祈るためのもの。神が、舞う人に降りてきて吉凶を伝えるため、素の人間では失礼だからと面をつけたというものだ。もうひとつは、「身代わり説」。能のほとんどの演目は人ならざるものが主人公となっている。役になりきるためとはいえ、死人になりきるのはいささか不吉なことと言えるので、その身代わりとして面をつけたのだという。また、面をつけることによって表情を取り去り、「仮想の死」を作り上げることで神や人ならざるものに近づこうとした、という考え方もある。はっきりした答えは見つかっていないが、面があることによって、観ている側の想像力が何倍にもなることは間違いない。